

〇〇先生はどんな人だろう

2024・4・17 重枝 一郎

教師が自分の思いや願いを生徒たちに伝えることは大切である。しかし生徒たちは、話の内容や言葉だけを聴いているのではない。「何を言っているか」よりも「どんな人なのか」という、人間性を見ている。表情や立ち居振る舞いなど、教師が表出しているすべてを、生徒はキャッチしている。

「なぜクラスとうまくいかないのか。先生はどうしたらいいと思う？」ということを生徒に聞くとする。往々にして次のような答えが生徒から返ってくる。

「朝、教室に入ってくるときに、笑顔で入ってきてほしい。もっと、笑ってほしい」生徒は、教師の「笑顔」に、人間味を感じる。

教師に求められているのは、「エンターテインメント性」である。生徒は感受性が強い。それは、本能だと言える。理屈ではなく感覚的に、大人の本質を見抜く。

私たち教師は時々勘違いをする。生徒たちは、教師の思いを察知して行動しているのだと。教師の「説教」に従っているのだと。

しかし、そうとは限らない。生徒たちは、教師の「印象」に素直に反応しているのである。同じことを言っても、〇〇先生と△△先生の反応が同じにはならない。

小学校高学年から中学生の時期は、思春期に入り、反抗期である。そして教師を一人の大人として評価する。例えば、〇〇先生は信頼できるのかどうか。口では偉そうなことを言っている、態度が伴わないと、それを鋭く見抜かれる。その先生の背景を見ようとする。つまり、教師に人生哲学があるかどうかという「人間性」の部分を見る。

だからこそ、教師は「大根役者」であってはならない。その事実を謙虚に受け入れて、勇気をもって自己点検する習慣をつけることが、「エンターテインメント性」を身に付ける第一歩になる。

また、教師は無意識に自分が「評価者」だと思っている。しかし、常に生徒たちや保護者から「評価」されているのが「教師」である。

だからこそ、「1メッセージ」で自分を語ることは大切になる。そして、言行一致の日常の行動を意識する。思春期の生徒が最も嫌うのは、「はぐらかす先生」「言行不一致の先生」である。「自分は教師として、一本筋が通っているのか?」。定期自己点検は大事である。

ならべてみよう

教師の思いや願いを伝えるための、ひとつの方法になる。

封筒に、バラバラにした「言葉」を入れておく。4、5人のグループで協力して、その言葉をひとつひとつ、つなぎあわせて言葉を完成させる。生徒たちはゲーム感覚で取り組む。完成した言葉を画用紙に書かせて、教室掲示をしてもよい。

メッセージの例として・・・

「また会ってみたいと思われる人になりなさい」「勝負は一瞬、努力は無限」「辛いから逃げるのではない、逃げるから辛くなるんだ」「あいさつと感謝と笑顔はすばやく」「できない理由をさがさない、できる方法を考えよう」「ありがとうとごめんなさいは、自分が先に言いなさい」・・・好きなフレーズを持ってこさせ、交換してやるのもいい。

